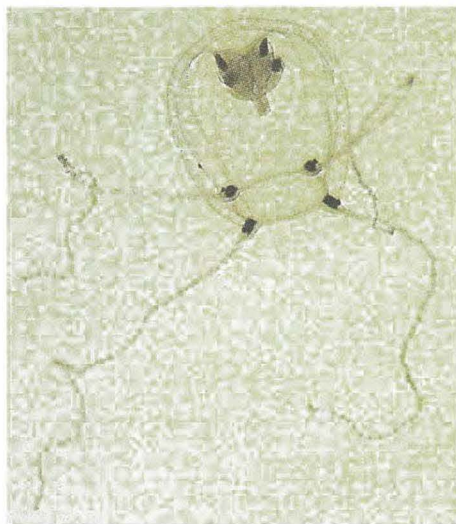


オオタマウミヒドラ



紅色の色素斑を持つオオタマウミヒドラ
の若いクラゲ (河村真理子博士撮影)

久保田 信

30



口花はネギ坊主のような形をしている。多数の短い触手の先端が丸く膨らみ、玉のようになっている。それで「タマ」が付いている。

100年ほど前、神奈川県三崎付近で採集されたクラゲを付けたポリプに基づいて外国人によって新種記載された。多数のクラゲ芽がヒドロ茎の下部にできるので、ブドウの房のように見える。

田辺湾ではプランクトンネットびきでなかなか採れない。岸近くで数個体が偶然採れたくらいだ。

わが国では本州から北海道

沿岸でポリプは潮間帯などで比較的簡単に見つかる。新種記載以降の73年間は日本特産だと考えられていたが、ロシアの日本海沿岸でポリプが発見された。中国にいる可能性もある。

クラゲはポリプに比べて小さく、成熟しても傘高はせいぜい2・8センチしかない。傘の縁にシンプルに4本の触手を持つ。それぞれの触手瘤(りゅう)の外側には1個ずつ眼点がある。これで光を感じて移動する。

生殖巣は雌雄ともフラスコ状の口柄を取り巻くように形成される。雌クラゲがつくる卵の大きさは通常のクラゲよりも大きく、一度に少数しかつけない。口柄の最上部の四隅には特徴的な紅色の色素斑(はん)がある。通常、外傘には刺胞が1個ずつ散在することが多いが、本種は外傘全体に数種の刺胞が塊をなしてパッチ状に散在する。恐らく、敵を撃退するのに有効なのだろう。

(京都大学准教授)